

「今後も良い出会いに恵まれることでしょう。  
より良い業務体制と組織をつくりあげ  
次世代にしっかりバトンを渡したいですね」

「ヒューズ・テクノネット」では、ガス供給設備メーカーの技術を活かして流体制御システムの設計・製造を手掛けている。半導体、医療、飲料分野など、幅広い業種において欠かせない存在だ。今後は燃料電池や環境分野、シミュレーション事業への準備も進めており、益々の活躍が期待される。本日は佐藤 蛾次郎氏が津田社長にお話を伺った。

Corporate Data



株式会社 ヒューズ・テクノネット

■本社  
東京都八王子市大和田町 5-24-14 TEL 042-660-1907 (代)  
URL: <http://www.fusetech.co.jp>  
■西日本事業部：兵庫県伊丹市 ■レスカ事業部：大阪府茨木市  
■堺営業所：大阪府堺市西区 ■名古屋出張所：愛知県清須市



代表取締役 津田 欣範

大阪府出身。大学時代にはマグロの養殖などを研究していたが、卒業後は大手ガスディーラーに入社する。経験を積んだ後、1996年に独立。半導体製造に必要な流体制御システムの製造・販売の分野で地歩を固め、意欲的な展開を進めている。

佐藤 「ヒューズ・テクノネット」さんでは、ガス供給を中心とした流体制御システム関連製品の設計・製作を手掛けておられるそうですね。まずは起業までの津田社長の歩みを伺います。

津田 学業修了後、大手ガスディーラーに勤めました。そちらでは半導体製造装置メーカーの担当となり、製造工程に利用する特殊なガスを扱っていたんです。当時は半導体分野の黎明期で、製造も手

探りの状態。私も基礎知識など持っておりませんでしたから、先輩方はもちろん、メーカーの方やお客様からも様々なことを教わりながら、仕事を覚えていきました。結局そちらの会社には13年の間お世話になったのですが、やればやるほど奥が深い仕事でしたので、独立するのならこの道しかないと思い定めていましたね。ありがたいことに支援してくださる方もいて、1996年に「ヒューズ・テ

クノネット」を設立しました。  
佐藤 独立当初はいかがでしたか。  
津田 5名でスタートした当社は、半導体製造装置メーカーより技術力を高く評価していただいたこともあって、比較的順調に歩むことができ、徐々に人が増えるにつれ、業績を伸ばすことができました。また2度のM&Aを弾みに、経営の活性化・事業拡大も実現し、現在では東京本社のほか兵庫、大阪、愛知にも拠点を構え、総勢70名を超える大所帯となりました。M&Aとはいえども決してマイナスの要因ではなく、一緒に仕事をしたいというメンバーが協力する形で進んだ話だったんです。前職でお世話になった会社とも、今なお親しくさせていただいているんですよ。私はこれまで出会いや人に恵まれてきたのだなとつくづく思いますね。周囲の皆さんには心から感謝しています。  
佐藤 順調な歩みを続けておられる要因は、人とのつながりを大切にしていっしょになるからなのですね。

「運と縁、そして努力——  
成功への近道はないと感じました」



「運も成功の大切な要素。周囲との良好な関係を保ち、良い出会いを得るためには、まず幸運を引き寄せるための努力が不可欠なのでしょう。津田社長はそういった努力を自然体で実行できる方。そんなお人柄に惹かれて集う人との縁が、社長のご成功の要因なのでしょうね」

# 視野とフィールドをさらに広げ 今後の躍進へとつなげていきたい

津田 人とのつながりは本当に大切なものだと思います。また、運も良かったのですね。自分自身が日頃から努力し続けることももちろん大切なのですが、努力だけでは何か足りない気がします。私どもが経験してきたM&Aでは、もともとM&Aそのものを意識していたわけではなく、人との接点ができていった中で選んだ選択肢のひとつ。たとえば営業活動では、ただやみくもに動き回るだけでは結果はついてこない。自然な流れに任せることやタイミングを捉えることも、大切ではないかと思います。

佐藤 なるほど。重みのある言葉です。  
津田 私がこの分野に入ったのも、運と縁だったと思うんですよ。大学時代はマグロの養殖を研究していた人間が、いきなり無関係の分野に進み、基礎知識の乏しい中でもここまで来ることができたんですから（笑）。それはひとえに、良い

出会いや縁に恵まれて、寛大な心で私を受け入れてくださった周囲の皆さんのお力添えがあったからこそなんですよ。

佐藤 今後の展望を、お聞かせください。

津田 現在、半導体の分野以外にも主幹となるべき事業柱を立てようと、既に具体的に動き始めているんですよ。次の分野として着手を進めているのが、燃料電池関連や環境機器などです。また、解析などを手掛けるシミュレーション事業への着手も、視野に入れていきます。

佐藤 解析……何やら難しそうです。

津田 オリンピックなどで使用される水着はこれまで、試作品を作り、実際に泳いで水の抵抗などを調べていました。しかし現在では、さまざまな角度から解析を行い、その結果得られた根拠によって製品が試作され、テストが行われます。実は2009年3月に合併した会社があるんですよ。このように事業の柱を増やし、株式上場が果たせるような態勢を整えていけたらいいですね。

佐藤 目標としては株式上場、ですか。

津田 当面の目標はそうですね。株式の



公開にはリスクが伴いますが、将来的な事業継承を考えるならば必要不可欠だと言えます。株式を公開するという事は、社会的な責任を負うことと同義。そういった形をきちんと整えることができれば、「ヒューズ・テクノネット」の知名度は上がりますし、将来この会社を継いでやろうと考える優秀な人材も現れるでしょう。また、外部から有能な人が入ってくる機会が増え、活性化という意味でも社内に良い風が吹くのではないのでしょうか。若い従業員もおりますから、彼らが長く働ける場を確保するためにも、企業として存続させる責任が私にはある。そして、良い人材に当社を引き継いでもらうことを、最終目標にしています。

佐藤 まだまだ御社の躍進から目が離せません。頑張ってくださいね！

（取材／2009年4月）



## 明日を切り開く経営者たち

## その戦略と視点

▼「企業は、ただ興すだけなら誰にでもできる。難しいのは、“継続”していくこと」——経営者として、企業の継続を目指すのは当然のこと。そして、それを実現するためには、後進の育成が不可欠だ。「ヒューズ・テクノネット」の津田社長も、人材育成には苦勞が伴うと語る。同社は現在、東日本のみならず西日本にも拠点を複数構え、設立当時5名だった従業員が今や70名を超えている。そうして躍進し続けている企業なら、なおさら人材育成における課題も多いに違いない。同社は試行錯誤の結果、部署ごとに

責任者を立て、一つひとつの部署でそれぞれに業務や人材育成へ対応していくことにした。その頂点に社長が立ち、統括するという格好だ。

▼人が増えれば、どうしても目が届かない部分が生じる。また、すべての問題をひとりで抱え込むことは物理的にも不可能だ。だから責任者となるにふさわしい人材が育ち、その人物の下で若い世代が成長するシステムを確立することは大切だ。社長は今後もより優秀な人材を育てるために、さらに環境を整えていくことだろう。